



新撰
折句いろは引

72

特
利9
3869
22



新撰
折句いろは引

利9
3869
22

三
世
奉
す
志
下

折句いろは

大正七年五月廿日
室井平藏氏贈

浪花園田萩風撰



9
3869
22

一日ははらりそりりかあのだ

イシ 入口も低ひ家居よ白風

イイ 影人像よ居てもさびさ

イネ 意地をさるるまはるまはる

イキ いたり〜もあいなごから

イコ 居つけもふかしの後を

イ言 ちつろのによご娘ありば一のる

イ言 ちのまじくくを融るを身たしを

イ言 伊勢でを花と枝もつを

イ言 いちのふまじ伊達者杖下め

イ言 ちのまじぬまこと板屋実まじ

イ言 いちくの西でまじそ下目ぢうい

イ言 ちつろに寒まきけて浴入る

イ言 ちのまじまじいせむけつらあり

イ言 いちのまじあつ月日あつの海

イ言 ちのまじ伊達者てぬ浪舟の料理

イセヌ 妹の春に元の年ぬ角力取

イトハ 命まから年よせまぬ花唄

イハ ちのまじを依と後合をちい仰

イマ ちのまじの燈打まけて内のみち

イナリ 伊勢はよのつてはいでまるとんる

イカ いちのまじくくを融るは足

イ云 伊勢はよのつてはいでまるとんる

イ言 いちのまじくくを融るは足

イ言 伊勢はよのつてはいでまるとんる

イ言 一代の娘長後つる大善書

イモ 色かぬまの夜あるきつる
イニシ わんまゝしてか房をおまゝかひ
イモ 今こそもたべていそぐみつみ
イセ 伊勢や原氏が 播きとらる
イニシ いそぐまゝにきつてあつた
イモ 今ひだしのちのぼるまゝ
イニシ 一門もあつた武士とありたり
イモ 妹よふいふおまゝ去らる
イニシ いやまをまゝと野あつた
イモ 今こそこのツイあつた男は士

イモ 妹戎下麻のえり杖
イニシ 今にねまてられ今邪
イモ 色里の隣に起きあつた
イニシ 川を古風な橋は信る
イモ 今こそいそぐまゝ
イニシ 一巻をかりてあつた
イモ いそぐまゝかゝつた
イニシ 今こそいそぐまゝ
イモ いそぐまゝのまゝ
イニシ 今こそいそぐまゝ

伊方 けりせぬ実出すと案考のな

イマ ちやうちよき落るゝ案の苦と脚

イテ 去しぬよはすも縁邪を

、 川の原のやうな別へ換へい

イウ 誰にん説く何と多し合ひ

イニ へうふも知ぬぬぬれ面白

、 海勢下んをやんとてなえん服

イコ けひそくぬれぬぬぬぬ

、 妹がなまけぬぬぬぬ

イキ ひと道古いあゆんであだ

イサキ ちやあきよさうりなぬぬぬぬ

イコ 今つ泡盛てあすい幕、隣り

、 いちのりそき後、松の乾

イコ 今つ泡盛てあすい幕、隣り

、 いちのりそき後、松の乾

イカ 今の葉刀 松さねと佃キ

イウ 今つ泡盛てあすい幕、隣り

、 いちのりそき後、松の乾

イニ へうふも知ぬぬぬれ面白

イコ 今つ泡盛てあすい幕、隣り

△

ろ

ロキ 炉^{ロヒラ}尻^キを振^ルるトきに仲人
 ロミ 海^ノ忠^義の足^ノ供^{トモ}給^{ハヤ}交^フ
 ロサカ 六^ノ寸^ハハ笑^ム人^ノ中^ノでの器^ガ子^シ供^{トモ}
 ロテウ 編^シまの物^セちろり^リ也^キ夏^ノの体^ヲ
 ロタ ろくに^キあ^キ一^ノよ^ハ行^クあ^ルるの
 ロラ 縁^ノ禁^ハ愛^シま^シま^シ信^ト人^ノの事^ヲ
 ロミテ 六^ノ秋^ノイの^キ夜^ノ夜^セも^シ多^クの^キ月^ノ夜^ノ
 ロキ 六^ノ秋^ノも^シか^ハむ^シ娘^ノの^キ志^ノ事^ヲい^ハし
 ロキ 存^シ次^ニあ^リ此^ノ邊^ノを^シて^ハお^ウる

は

ハコエ 愛^シぬ^キを^シ何^レ成^ル候^トも^シう^レい^ハま
 ハコイ 花^ノも^シれ^ハ老^シ女^ノ房^ノ又^ハマ^シイ^ハカ^シの^キう^レく
 ハコシ 強^シく^ノの^キ女^ノら^ハさ^ハま^シあ^ウけ
 ハコナ 母^ノ親^ノの^キ形^ノを^シ時^ノ中^ノの^キ中^ノと^シ遊^ブ
 ハコバ 船^ノ倉^ノて^ハあ^リる^キ糸^ノれ^ハあ^ウう^レさ
 ハコセ 赤^シ赤^シを^シこ^ノが^リと^シも^シ髪^ノの^キう^レら
 ハコシ 赤^シ赤^シも^シあ^リる^キ火^ノの^キで^ハあ^リま
 ハコシ 赤^シの^キ者^ノあ^リま^シは^シ一^ノさ^ハ十^ノ寸^ノ後^ノ
 ハコシ 赤^シの^キ者^ノあ^リま^シは^シ一^ノさ^ハ十^ノ寸^ノ後^ノ

ハコエ 髪解あるに女の坊も持

ハシシ 母親ハ啼^{シカ}く泣れぬらさ

ハシシ ちりめいと多^シわてい^シ風^シの

ハシヒ 法^ハを^トま^シ子^シ依^ト去^ト比^トの^ト人^トころ

、 依^トま^シと^シ悲^シれ^シ色^シぬ^ト一^トさ^トかり

、 髪^トあ^シる^トみ^ト成^トん^トあ^シる^ト貧^ト乏^トす

ハシシ 涙^トを^トで^ト胸^トの^ト身^ト用^トは^ト思^トひ

ハシシ 若^トから^トや^トし^トと^ト踊^トり^ト子^トの^ト精^ト

、 花^トの^ト聲^トら^トけ^トド^ト 櫻^ト 柳^ト

ハカセ 抜^トま^シと^ト不^ト思^トお^トま^シま^シま^シら^トく

ハシシ 既^トあ^トい^トい^ト事^トは^トぬ^トる^ト笑^トか^トく^トれ

ハトエ 母^トら^トし^トく^ト依^トら^トし^トく^ト探^トつ^トて^トは

ハシテ 高^ト流^トの^ト死^トど^トあ^トん^トる^ト丁^ト度^トど^トも

ハシシ 乃^ト子^トい^トる^ト墓^ト子^ト取^ト方^トと^トい^トく

、 一^ト節^トす^トも^ト娘^ト女^トと^トい^トふ^ト男^ト有^トり

ハシシ 母^トも^ト今^ト浮^トき^ト本^ト流^トと^ト振^トり^ト狂^ト

ハイ 走^トし^トる^トが^ト物^ト子^ト結^ト妻^トと^トす

、 半^ト分^トの^ト泡^トの^ト石^トと^ト岩^ト

ハシシ 血^トく^トる^ト事^トあ^トら^トず^ト碎^トつ^トぢ^トれ

ハシシ 化^トを^ト捕^トて^ト又^ト、 泣^トき^ト聲^ト

ハイシ 母親の口おあるきハあれてある
 ハネ ちやるりのあきつらーさかか
 ハナ 化かされて今物又あがねをかす
 ハナ 母は昔ははされてあさ 児
 ハナ 振まきく海へさゆかす
 ハナ 腫の割切る 種乃よハ風
 ハナ 張合ふのさふ 男もあさ
 ハナ ちやるりのあきつらーさかか
 ハナ 花の見えるし 潮と對せぬ

ハナ 花の見えるし 潮と對せぬ
 ハナ ちやるりのあきつらーさかか
 ハナ 化かされて今物又あがねをかす
 ハナ 母は昔ははされてあさ 児
 ハナ 振まきく海へさゆかす
 ハナ 腫の割切る 種乃よハ風
 ハナ 張合ふのさふ 男もあさ
 ハナ ちやるりのあきつらーさかか
 ハナ 花の見えるし 潮と對せぬ

ハコト 高麗も始末あらく夏の中

ハセ 掃ヶバあつのも福のお怪り

ハケム 花をく吹、舞うつらり物のため

ハコス 湯のみさつてさきさきいさも怪り

ハス 履きかきくさぬさきさきさき

ハシメ 髪をさきさきさきさきさき

ハセ ちびさきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ハコト 髪をかきさきさきさきさき

ニヤウ ニ在^レうけ^テ御^レ来^ルえ^テぬ^ルよ^クモ^リ
 ニコヒ 憎^ムい^ハれ^タ成^ルお^レが^レ御^レ来^ルよ^クモ^リ
 ニイフ 女^ノ房^ノの^レ足^ヲ見^ルお^レ美^シの^レ深^クよ^クモ^リ
 ニミキ 人^ノ間^ノよ^クモ^リお^レ御^レ来^ルよ^クモ^リ
 ニマニ 二^ノ夜^ノの^レ靴^ヲソ^ク茶^ノ代^トと^シぬ^ル
 ニホ 小^ノく^いは^レう^キに^レ憎^ムして^おわ^ルこ
 ニアラ 女^ノ房^ノの^レ美^シの^レお^レま^ルハ^レ老^シて^おら
 、 幼^キお^レや^ト有^ルお^レ御^レ来^ルよ^クモ^リ
 ニヤウ 人^ノら^レお^レ美^シで^おら^レぬ^ルは^レ

ニワヒ 女^ノ房^ノよ^クモ^リお^レ御^レ来^ルよ^クモ^リ
 ニカ 紅^ガお^レあ^レう^キに^レ憎^ムして^おわ^ルこ
 、 小^ノく^いは^レう^キに^レ憎^ムして^おわ^ルこ
 ニマキ 庭^ノ邊^ノり^ノお^レあ^レう^キに^レ憎^ムして^おわ^ルこ
 、 女^ノ房^ノよ^クモ^リお^レ御^レ来^ルよ^クモ^リ
 、 二^ノ夜^ノの^レ靴^ヲソ^ク茶^ノ代^トと^シぬ^ル
 ニハ 小^ノく^いは^レう^キに^レ憎^ムして^おわ^ルこ
 、 小^ノく^いは^レう^キに^レ憎^ムして^おわ^ルこ
 ニチ 女^ノ房^ノの^レ美^シの^レお^レま^ルハ^レ老^シて^おら
 ニワカ 女^ノ房^ノの^レ美^シの^レお^レま^ルハ^レ老^シて^おら

ニラカ 倭カ 雨つりしものなる候ハ、
、 似て今辻橋任なり 今軍に露
ニラヒ 似て短衣身遊と浮きを多
ニラキ 女房様とあつらひを新がゆ
ニサ にくては、その様つては、
、 西川の集冊に、葉也
ニナ ぬくらしめ、
、 似ていふとあつて、世の中、
ニラコ 女房のよるひ、
ニラヒ ぬく人、

(何)

ホシナ ぬくがん柿の餅多の、
、 切あはれ、
ホカミ ぬくぬく、
ホツ 腕のぬく、
、 惚く、
ホキテ ぬく、
ホクシ ぬく、
ホメイ ぬく、
ホム 法、

ホトト 本義の擗^クなるなり

、 ゆる碎の如く、^クなりがひぬをぬ

ホホ 本堂が 遠^クなるほどききぬぬ

ホトチ 行^クるほどして、^クなりがひぬをぬ

、 ち^クなりがひぬをぬ

、 ち^クなりがひぬをぬ

ホカミ 細^ク眉で、^クなりがひぬをぬ

、 行^クておくが、^クなりがひぬをぬ

ホウシ 方^ク遠も、^クなりがひぬをぬ

、 ち^クなりがひぬをぬ

ホウシ 外^クなるぬぬは、^クなりがひぬをぬ

、 佛^クでも、^クなりがひぬをぬ

ホウシ ち^クなりがひぬをぬ

、 ち^クなりがひぬをぬ

、 ち^クなりがひぬをぬ

ホノ 及^クたや、^クなりがひぬをぬ

、 ち^クなりがひぬをぬ

ホム ち^クなりがひぬをぬ

、 擗^クぬぬの、^クなりがひぬをぬ

ホトト 枕^クで、^クなりがひぬをぬ

また本儀と角力の後戻りかへー

、 不しと方捨さまがことろの如せぬ

、 六ト 室務母とまのきん 侍あり

ホソ 和れ人の傍で驚おでたまひ

ホタ 盆でまゆりてたきつけとりよ

、 けつく合忠たをこ勢もなき

ホライ 卯と子と相いり死てりともた

ホレ おまの暇とあまの御せともあ

ホイ 坊より丁見かまきりよ 現つ乳

、 ほんのりと日の入りー毛里

ホリ 中さよと號ーこれ有るもつ解の

、 ゆると丸のふんこーた科死給

ホホ 望成さくましくーおまあくとお母

、 卯くまぶら守ホーいーく

ホエト 徳よおんとまねもほむ依の意

、 かくーさるは女番まーことわらん

ホウ けんばのさあも運にもたれる

ホコ 柳まあを我とあさめるか 柳

ホテ 柳まあがもんとあさるこはの傍

ホシヤ 骨よ入るよ入る日なり探さく



へイナ 塚^{イナ}の 新^{イナ}の なるあつしき
 へス 五^{イナ}の せが^{イナ}で ち^{イナ}と 持^{イナ}
 へス 魚^{イナ}の ち^{イナ}と 吸^{イナ}あ^{イナ}る
 へス 序^{イナ}でも ち^{イナ}られぬ子^{イナ}の ち^{イナ}と 腕^{イナ}
 へス へか^{イナ}に 絢^{イナ}よ^{イナ}と 突^{イナ}て^{イナ}
 へス ち^{イナ}て^{イナ}るも ち^{イナ}き^{イナ}寺^{イナ}の 幕^{イナ}目^{イナ}
 へイ 牛^{イナ}でも ち^{イナ}ぬ 強^{イナ}海^{イナ}の 換^{イナ}
 へス ち^{イナ}は^{イナ}て^{イナ}る^{イナ}わ^{イナ}ん^{イナ}よ^{イナ}なる
 へス ち^{イナ}の^{イナ}よ^{イナ}入^{イナ}に^{イナ}三^{イナ}日^{イナ}月^{イナ}

へモ ち^{イナ}と^{イナ}ら^{イナ}列^{イナ}持^{イナ}て^{イナ}お^{イナ}持^{イナ}イ
 へス 下^{イナ}の 湯^{イナ}の ち^{イナ}と^{イナ}なる
 へサ ち^{イナ}地^{イナ}も 別^{イナ}家^{イナ}の ち^{イナ}と^{イナ}なる
 へモ ち^{イナ}を^{イナ}い^{イナ}て^{イナ}ち^{イナ}と^{イナ}なる
 へイ ち^{イナ}を^{イナ}見^{イナ}る^{イナ}ち^{イナ}と^{イナ}なる
 へス ち^{イナ}り^{イナ}る^{イナ}ち^{イナ}も^{イナ}入^{イナ}る^{イナ}ち^{イナ}なる
 へス ち^{イナ}も^{イナ}あ^{イナ}る^{イナ}ち^{イナ}なる
 へス ち^{イナ}の^{イナ}ち^{イナ}も^{イナ}ち^{イナ}なる
 へイヨ ち^{イナ}ん^{イナ}ち^{イナ}も^{イナ}ち^{イナ}なる
 へイキ ち^{イナ}の^{イナ}ち^{イナ}も^{イナ}ち^{イナ}なる

トシ 友をいへそをいへいそをいへ
 一年あつたれがたつてはたまふ
 トキ 友の子をいへたまふ運にけり
 トキ 隣りへめつたにけり捨小舟
 トキ ぞやうかめよ合はれて穉あり
 トキ ぞやうかめうらみあはるり孫
 トキ ぞやうかめうらみあはるり大兵
 トキ 戸をたふす孫よ有明の月
 トキ けむのうらみあはるりにあはる

トキ 友をいへそをいへいそをいへ
 トキ 友の子をいへたまふ運にけり
 トキ 隣りへめつたにけり捨小舟
 トキ ぞやうかめよ合はれて穉あり
 トキ ぞやうかめうらみあはるり孫
 トキ 戸をたふす孫よ有明の月
 トキ けむのうらみあはるりにあはる

トミテ どのくも身にかゝる世法をよみて

トモ 池工を身が非うつてふかり

トモ 年又似ぬを井しやせる男去り

トモ こそあ人のいと女を腹たこ付

トコ どのくもいへても替む女のい

トモニ こそ使て病りしやうり悟ふい

トモ こそいへもなつてきる似る身

トア こそ川よりいふいおを

トモ 及ぬ堀乃の申さ 吸あ

トモ 向うだ徳らるて女房にこそ

トモ 舟をくさるる近かうんは料理舟

トモ 佐であいすに見て眼よこ

トモ 徳ならはあつても夫のむい

トモ ぬる人あめたりむちばん

トモ ぶあをいれはるる次手のうら

トモ 降りを燦ス又あきて娘

トモ ぶんはあつてのがあたひ

トモ 名を感て高も神りの目をあ

トモ 供よなぐまて果敢出

トモ 解合ふ抱へるごかげの

トヨ 時く、あつて見る仔細をただけ
、 笑つくりと懐で形をぬぬ出候
トキ 解きぬれ、解くぬもあつて
トク 懐のなかぬも大なるあいの
、 科カ、改りびるを考ふ舟
トク どちらにも解きさのまじり
トキ 解きぬれぬれ、さす下
トク 解きぬれぬれ、さす下
トク 解きぬれぬれ、さす下
トク 解きぬれぬれ、さす下
トク 解きぬれぬれ、さす下

ち

トク 父もあつて、されい、い
トク ちんて、懐を
トク 袋で、さす子、あで、ハ、ハ、ハ
トク ちんて、あつて、懐を
トク 子活、あつて、懐を
トク 指針、あつて、懐を
トク ちんと、懐、あつて、懐を
トク 懐、あつて、懐を
トク 懐、あつて、懐を

リ

三三 引籠のしん籠籠ぐあつうい
 三三 ち方へまゐるまはうし柳三三
 三三 柳口あつう伐大をいよ
 三三 慥元伐やめて仔細おお
 三三 三三の我はうゝ言人づうい
 三三 流義とまてて使ハ流
 三三 三三あつう始をつまて初極
 三三 三三の後三三感下るおま
 三三 三三とまておま三三の候

ぬ

三三 ぬうりなう泊さかひるり
 三三 ぬまおとくくまらるる
 三三 ぬま控城あつうくも三三田山
 三三 ぬまけさうて三三三三三三
 三三 ぬま花ぞおまあつう三三三三
 三三 三三三三三三三三三三三三
 三三 三三三三三三三三三三三三
 三三 ぬまおとくまらるる三三三三
 三三 三三三三三三三三三三三三
 三三 三三三三三三三三三三三三

又トコ 道さうてそまかあものまごころん火

又コ ぬけめのあいに恋よむのうら

又エハ 接ふ人々の恋と申すのうらむは

、 望人の恋は森のたぐひにやうを

又チチ ぬうやちとちと信のせ渡りあ

又フ ぬきんぬくりのあふるこころ

、 ぬきんぬくりのあふるこころ

又シス ぬきんぬくりのあふるこころ

、 接ふ人々の恋と申すのうらむは

又ア ぬきんぬくりのあふるこころ

又ハシ ぬきんぬくりのあふるこころ

又ロコ ぬきんぬくりのあふるこころ

又シシ ぬきんぬくりのあふるこころ

又ユ ぬきんぬくりのあふるこころ

又ヨフ ぬきんぬくりのあふるこころ

、 ぬきんぬくりのあふるこころ

又イワ ぬきんぬくりのあふるこころ

又ハセ ぬきんぬくりのあふるこころ

、 ぬきんぬくりのあふるこころ

又ムト ぬきんぬくりのあふるこころ

ナイト 親の身へいぬる事にてはこつと

・ 尾よなすいといふる飛ぶるを根

ヲミ 秋又獲てこころる 高人

ヲトシ 身をてぬればアキ芝居例

・ 母の丸をまきふくは侍りし衆

・ 折し合いよまけて史筆ぞおどろ

・ 仙遊らしき及娘の芝居を

ヲミ おりろる年にて一人入る程

ヲシユ 男の身知つてわらの八健政あり

ヲイ 奈づる作トよるがざらへ、

ヲカ 志いひぬる事かむい後んる

ヲマ 着て着ておるづらある

ヲカセ ちまよけあさるのに執らる

ヲスミ おりろる控へおるもたがけ

・ 起キしはまがくハ流のれし哉

ヲイト 女トあよいしれぬ悟る事

・ ちみおりて舞かひことハ初

・ おやほめもアアんあさる佳な性

ヲヒ 女らしこの一ト云が 切

ヲトシ 白粉のふちもろも 強へし

カキ 新ゆきせきや物 雲つらまよきのは

カコ かんあんのんちる男のまりの

、 橋をわたりておろすのてねをま

、 かりかにあつても有る急なま

カキナ 城をわたりておろす海をま中のあ

カキイ 風吹キ又件在りあつて活きてある

、 川舟のあつてはつていふは

、 健がたつたおちるまもつひかり

カカ 堰キ又つたおちるまもつひかり

カキカ 雲ちつとあつて人よおちるま

カミコ かんあんのんちる男のまりの

カキ 可なり 困なり 難多難の

カキ 雲ちつとあつて人のあつて

、 雲ちつとあつて人のあつて

カキナ 雲ちつとあつて人のあつて

カキ 可なり 困なり 難多難の

カム 雲ちつとあつて人のあつて

カキ 雲ちつとあつて人のあつて

カキ 雲ちつとあつて人のあつて

カキ

カワフ おこい入へあつて居るおつり結

・ 秋をながと我をて扱と獲く

カヨ 着座のころが 娘の極ぶ。

カサヲ 叶く後いさすぐに実とてひかり

・ 登みぐさききんぐぬは、年

カカ 款入るるとの片意地を父

セヲ ちや体でいへん丁思めも何ト完

カヤ 結子よ何うしこき、にちめを平

カフト 甲しふふ名義の市原、年を糸

カワフ 可き、子で我、丁也、せあめあ

カキ 極の、いさか、とめぬる、ある

・ 獲り、衣、の、善、徳、の、為、の、あ、も、あ、ら、

カキ 髪、よ、す、じ、ま、の、あ、の、様、妙、り、り、の、

・ ありぬと、ま、ま、い、か、か、て、も、の、ご、く、あ、

カキ かい、ら、こ、し、ら、ま、あ、る、者、仲、居、直、

カキ わ、ん、と、ま、路、徳、も、思、ひ、や、せ、ぬ、

・ ち、と、ろ、の、後、は、花、ま、め、る、

カキ 少、少、人、も、我、と、ま、く、ら、の、乳、を、飲、ぶ、

カキ 片、よ、に、た、ま、ぬ、母、が、引、き、ま、る、

カキ 後、も、あ、ら、う、女、の、あ、い、ま、

オト 大さんお入るも奥のまぶく
たしどくろぬ丁度と依はつて
クマク 恨みしつゝあまのぬきのおか
タシ 大玉のいそふらういそふ人
、 たくさんまうれてんいそをい
タテ 旦那もなまてせいでかたり
タカ ぬるくつかるまの敷があ
、 たたこの火入よちるにけあ
タへ 抱きかきまうの下よる 備
タテシ 代はやく丁度が破であつた

タユシ 敷さよはつた年多一帯少袖
タシ 大い乃まゝは始末の事
、 恨く実のたげへ 居て
タシ 敷板でるびく母のあがり
タハ 大切さるがごとくあつた
タコ 娘の縁をさまよて泣す
タカ 是れは娘の年が死んでくれ
タノ 焚く薪乃白く服のまに
、 左足の天窓めらう千人
タシ 藤乃よまてまへ、

礼

レムフ 禮のきき梅見中々年と夫婦連
 レミシ 衣レイラシとくくよりかき帯ビヤウ小袖
 レロ 餅レロのころに露ロ次ジの雪ユキ渡ワ
 レヨヨ 重レイキヤ宝ホウをねむ娘もおがすらく
 レフ 是レきく使シ元ゲン美ミと春の粧
 レヨヨ 連中レの坊手フカテ徳トクを又マタよひ娘
 レユイ ちぢレウゼンふく仍レたかりあつツつめあ
 レフ 礼レのちり移ヤもまマたのゆる
 レスホ 儉人ケンジンのよがさヨガサも足タで物モノらラ

乃

ワムフ 居レれぬレ物モノ成ナる方カタめメ居レる
 若ニヤ妻メの後ノチ妻メを祖ソの神カミも
 シユ 母イセシもつめぬレ俗ソコをガけ
 廉レンお共ニ花ハをカよシてモよシ
 ソカタ 後ノチつてもモ唯タがガ者モノをシ止トぬレ
 ソチ 葬ソウ礼レもシりけレあマりの後ノチ
 ソツ 居レるノ途チでテとリやカのノ事コト
 一 海ウミぬレむレうレのノ飛トビもモくクあハい
 ソヨウ そノ人ヒトのノうウふフ合アつテはハ乳ニ母ノのノ

ソハウ 湯マシの始^{ハジメ}と幸^{サイ}よりし^シの
 ソヲ 新^{ニホ}帯^{オビ}扱^{アツ}キ一^{イツ}ツラでお^オ陸^{リク}ラ
 シムラ その後^{ノチ}チのむ^ムご^ゴ被^{カフ}も^モ深^{フカ}か^カる
 シエラ せれとに^ニエと^トな^ナ膚^{ハダ}を^ヲ折^ヲか^カす
 ソヲ 扱^{アツ}キの^ノ所^{トコロ}始^{ハジメ}と^ト折^ヲか^カす
 ソカラ 毛^{モウ}汰^{タイ}テの^ノか^カう^ウの^ノ扱^{アツ}キ^キは^ハ折^ヲか^カす
 ソツ も^モあ^アら^ラそ^ソう^ウよ^ヨ杖^{ツエ}と^ト扱^{アツ}キ^キ
 ソイ 毛^{モウ}汰^{タイ}テの^ノか^カう^ウの^ノ扱^{アツ}キ^キは^ハ折^ヲか^カす
 ソイ 麻^{アサ}後^{ノチ}の^ノ俗^{ソク}父^フの^ノ一^{イツ}と^ト扱^{アツ}キ^キ
 ソウ 神^{カミ}を^ヲ衆^{ムラカシ}ふ^ヲ扱^{アツ}キ^キと^ト折^ヲか^カす



ソツツ 和^ワ日^{ニチ}の^ノ勢^{セイ}ま^マあ^アり^リる^ルま^マの^ノ実^ミ
 ソウ 教^{キョウ}の^ノ力^{チカラ}で^デ神^{カミ}の^ノく^クら^ラを^ヲ折^ヲか^カす
 ソイ 扱^{アツ}キ、扱^{アツ}キ^キの^ノ日^ヒが^ガあ^アり
 ソキ 妻^{ウメ}も^モち^チと^トま^マは^ハし^シは^ハ本^{ホン}毎^{マイ}ま^マに^ニく
 ソソ 所^{トコロ}を^ヲ扱^{アツ}キ^キ分^ワち^チ白^{シロ}臭^{ニホ}へ^ヘ近^{チカ}よ^ヨり
 ソ、 扱^{アツ}キの^ノ時^{トキ}扱^{アツ}キ^キう^ウら^ラま^マの^ノど^トき
 ソ子 扱^{アツ}キの^ノま^マを^ヲと^トり^リ下^ゲる^ル形^{カタ}は^ハ染^{シメ}た^タぬ
 ソキ 扱^{アツ}キは^ハ知^チる^ルも^モ恐^{コソ}か^カく^ク分^ワち^チを^ヲ扱^{アツ}キ^キ
 ソト 衆^{ムラカシ}の^ノか^カ人^{ヒト}滞^{テイ}の^ノま^マを^ヲ扱^{アツ}キ^キ

ツトシ 老いも年けもるは旅よりめ

、 海よりあめあつても 雲より空を

ツキニ つまよめてゆく夏はよるに

ツマナ 御名に女念のこまき 夏はあ

ツノ 仗のちあめますこ 秋は

、 散る雪のま 秋はあつと焚く

ツサカ 海をさうし 遠く人よわ 女は

、 葉のけの 嘆き 曲揚く 舞を

ツミ 空をきき 飛ぶこも 雲のま

ハキ 空をま 雲い 母のあを

ツギム 朝日のあはし 舟中のひり

ツミ 空のまを 雲より 海は

ツツウ 雲をくよ 雲を 雲の

、 月かげを つまよ ぬ

ツアニ 色をす ちて 海の

ツバヤ 空をま 雲を 雲を

、 空をま 雲を 母と 女房

ツミニ 降して 雲を ちあ

ツワノ 降して 雲を ちあ

ツヨ 月夜 遠く 雲を

水

子ノサ 紐束の糸を根引と云へむ
 子ノフ 糸の根を引つて廻るを根引
 子ノ又 根の有りともあめつと根引
 子ノカ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノハ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノイ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノヒ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノフ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノハ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノイ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノヒ 糸の根の引つて廻るを根引

水

子ノカ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノフ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノ又 根の有りともあめつと根引
 子ノカ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノハ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノイ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノヒ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノフ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノハ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノイ 糸の根の引つて廻るを根引
 子ノヒ 糸の根の引つて廻るを根引

ナイエ 仲人喜つても先き、碎つたれ
 ナト ありうさ月よ我れと若くは
 ナハ ありあうすは又去キの状
 、 夏もなまらん 船音く物
 、 酒をわかいぶく鼻くこくおま
 ナウ ちああい 蒲草にさす也のゆ
 、 海をきり分お意成すくもれ
 ナサ、 ちげきの岩峰あみあう守花さか
 ナサエ 何ぞぞまよさかしてわら 於うら
 ナカエ ち持の物にさ成てせぬ 江ア度り

ナサカ 中成せうさ先き、健て信守男流
 ナツト ありうさ使よそあてぞはばこや
 ナミ 仲居の余承えあもりうさぬ
 ナナハ 碧ラをより 訓トヤカも母へ
 、 ちああい 飛りまの店よ嬉も色
 ナミ ちんのとろよ 夜時キ 乃 弘
 、 生草ハより 尻 娘ぬつよあ
 、 七ナま下もふぶ 扇どりの
 ナカ 中成まらういさ 陰チでま
 ナムハ 何ぞぞあを理こらる 春の霞

ら

ラリル らくさくの料理をおきてるものか
 ララス 丸をよめかき嫁入るるがりや
 ラホ 老武者よ 紋の彩
 ラハフ らくさつとあふあふ 子仕合
 ライツ 来年といふ仲の有り 只の人
 ラクキ ちやぎらい 乾くけてわる 金園寺
 ラケル 老人も下女がちそく とももに矢
 ラキシ 坊主の所々ぬえと知り多く 主の心
 ラトフ 茶の考もさるりゆうい 古小袖

む

ムエタ 婿きくあつて母の縁づく海
 ムセム 花をよめかき嫁入るるがりや
 ム 向ふもさる事のさうぬむむむ
 ムミ 味ひるものさうさうは帆をまぐ
 ムセウ ちりやりにさるるさうさうれ
 ムスロ ちりやりにさるるさうさうれ
 ムシハ 娘の子さしの海よ 歯を合を
 ムシ 梅の葉もさるるさうさうれ

ムキ ちくぢき友達がまて路家の代
ムシ 味ついでてある芝居のうら
ムクテ する借してふれ人をばあけい
ムコ ちくぢきの喰い好きの家の
ムキ 娘アそ群ふきり流乃奇
ムコ 梅アアソとテス 仙居の燈キ
ムクテ ちくぢきをまじりてふま
ムセウ 梅咲やまのよめてある

ムアム 勝たひ何なり南と何
ムシ 味ついでてある芝居のうら
ムクハ 虫年美の公界人より人
ムシ 娘アそ群ふきり流乃奇
ムシ 梅アアソとテス 仙居の燈キ
ムクテ ちくぢきをまじりてふま
ムセウ 梅咲やまのよめてある

△カシ 梅が香気風がそよけて流る春
 △ン もいふやを 梅香の 流る
 △ 梅はよほ成るおるまぬく
 △カ ちりまどさへど 小段も 悪魔の教
 △ア 娘は梅に秋のかさ川
 △クシ ちりあ成るまき門は仕く人女
 △マ 梅はよほ成るやきものゝ 美
 △クラ ちりあ成るあてやちれも 思ふ存
 △スフ 梅はよほ成るまき 文婦の
 △フマ ちりあ成るあてやちれも 思ふ存

う

△カシ 梅が香気風がそよけて流る春
 △ン もいふやを 梅香の 流る
 △ 梅はよほ成るおるまぬく
 △カ ちりまどさへど 小段も 悪魔の教
 △ア 娘は梅に秋のかさ川
 △クシ ちりあ成るまき門は仕く人女
 △マ 梅はよほ成るやきものゝ 美
 △クラ ちりあ成るあてやちれも 思ふ存
 △スフ 梅はよほ成るまき 文婦の
 △フマ ちりあ成るあてやちれも 思ふ存

ウチ 心重信 隆日と云ふ東郷の事
 ウチ 又出くを夫へ 贖はぬ能る
 、 うち一は只の女の風俗と云
 ウト うつかり生そこの佐の味と云
 ウチ 亦志母を父母の元へ 遣うける
 、 善人のちいさき事と申す
 ウコ うりらくと 肥出と云ふ
 ウヒツ 恨むものも 恨まふものも 是を云ふ
 、 うち一は 灯は月のあるを 添入
 烏山 年長者の 家へ 入りて 居る事

ウキラ うち一は ことばを 申すは 恥と云ふ
 、 信を 申すは 恥の 持て 居る
 ウク うち一は 色の 赤を 言ふは 恥と云ふ
 ウキ うち一は ぬり 侍は 恥と云ふ
 ウカ うち一は 髪は 洗はぬは 恥と云ふ
 ウヨ うち一は 飯は 又 用が 片手
 ウホ うち一は 髪は 洗はぬは 恥と云ふ
 ウカ うち一は 髪は 洗はぬは 恥と云ふ
 ウラ うち一は 髪は 洗はぬは 恥と云ふ
 ウキ うち一は 髪は 洗はぬは 恥と云ふ

多 退き出の夢にうら海よ戻し
 後の事思て換の有まの
 ノモト 跡事りのと下思乃時の意
 心 心嘆きりのお惚れの様り口士
 ノモテ 事合の傍ふ有跡多前等々
 ノト 軒をさる月をさおひの解るご
 花レ 飲むさの門はとくが礼の及
 事 事あふ刀ナ跡一て蓮の
 一 咽のトツかきつて入れ
 七 憐りの風と一いぬさの

多 花津でたのさ今女中
 ノトカ のらまきをてまの隣の
 一 海へ入れそつと司片をぬ
 ノツ のらり海を舞を復たつと外
 ノモト 近き海ふりのとまの時の
 一 後事思て換の事
 ノト 跡事りのと下思乃時の意
 ノフ 心 心嘆きりのお惚れの様り口士
 ノト 軒をさる月をさおひの解るご

キヲ 際々ぬ時のききありや由まはし
レカ 後々為成とみくうはそと
、 ちくちくわりの尻のわくけや
レヲ ちあちとむ親とけい、ちかかん
ノキ 暖を居のうとエと男のちかかん
ノイ ちあ公でアと今世持の人
レト 伸し短じのうのちとせむべ
ノイ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ
レト ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ
レト ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ



クワム 来る人、ちあちとま
クシム ちあち人、ちあちのちあ
クスス 西成出てちあにちあ
、 ちあちとちあてちあ
クト ちあちとちあてちあ
、 ちあちとちあちとちあ
クムト ちあちとちあちとちあ
ンチ 曲橋お計りのちあち
キイ ちあちとちあちとちあ

クラノ 善強名御堂ヨムロの巻を以り
クチハ 曲舞のちうぶきなき母乃情
、 響り又ちんを居るこゝやい虫
、 口舌の長をそゝ花見てちや
クケ 幼どもつまは似珠乃祝
、 新キキ一よまこ下弦のがくそく
クム 口説くそ我身成社てむどやか
クム にはどよは舞のこゝあぬまふ別
クチハ ことまでちん命り孫は拂はれ
クケ 美々の灯成消え修城の舞

クラ くらまりととと流の伯母
、 口説く見道バラ楽乃ち
チハ くらよめの父の如我なり
クキ 九十九夜らの巻のが月
クヤ くらぶとさうやうと吹キヤリ
、 口説くして遊やめぬのほほ
クヒ 来るの遠く女座のふい人
クヤ 元日は巻のこゝなる巻の足
クコ くらがりてこゝあつこの跡
クヤ 昔を入りあごよ新

マタ やるせもの母くろかきのたごこ倉
 、 やうとくはかき入るまをまじがはる
 マシラ 赤きんははるまじをまきんた
 、 宿がくこびんがうらしい大女房
 、 家遠く下る家館の大百姓
 マム やさしききふあおちて思
 マウニ 宿まきまはへがうまもまじ
 マテ けらうううまの我がえ
 、 母の百夜ありありを
 、 ありなりとも 寝るるも妙

マツテ 藤つぎき連よ恋どで出ると業
 マウイ 病公まあうす思のまういんま
 マウマ 若をりり曲橋の友成と上座
 マテヨ 夜又でわら父もはあす家の流
 ママナ 病ごころのくハ情もあふふ
 マハク 赤の林とまれぬまのあし利
 マウ やうみの海は 燈つきの舟
 マツテ 安んずる連とあうくまあける
 マホク 遠きまをなうういれて
 マライ 病あはれをよまごせぬ衣長持

①

ア 今一玄ツイのるにほひる業
 コホ 町廻しだけハ櫃をきむをさう
 〆 四り先のだらりと舞すおのり
 ココ 揺らなうき 子うらまを状
 コカ 子んまに神くまあふかきすの
 〆 松も色かてく本綿乃かろ綿
 コシ 先ちお通りとジロリ銀差
 〆 まこと成拵て志うらまをり
 コモ 侍かまのむのまぐりのまき

コマア 子んまを侍の風俗もはしる者川
 〆 まか子床のかれ浅サーさ
 コヲ 雁セハ一きゑの志川うさ
 コカモ 侍をさき松子ハは業ト拵うらま
 〆 松の子を習ておるよめてあし
 コア 四りのまもなり 雨の夜様
 〆 侍をるほろさちんうんと森
 コホ 密書とたき合ふのを命のる
 〆 又のまろ少殿成拵るに吸ふ
 コア ナまのあまのしうまぬらぬまを

アホ 儂あゝぬどけを口流も程を新

アヲコ まあ初ふみありやうあめの子息徳

、 ちんちん倫のおぢたいてこゝろ

マカカ 町あれてうら 婆鏡の乾淋

、 窓下成らう風もろくみの敷入り

、 枕 眠りも悪新り乃情

アト 石の石のい休イちねこゝろ同守

アハ ちんちん人よえりやうがホー

、 ままのた糸の流布すておる

マカモ 今一年結く結うて原火ま

アヲツ ちんちんおあう 暫き次

アハ ちんちんの使り眼を踏ておぬ

アヲ ちんちん女 一ツ 足

アヲ ちんちんと寝床の着も縁く実

アヲ ちんちんちんちんちんちんちんちん

アヲ ちんちんちんちんちんちんちんちん

アヲ ちんちんちんちんちんちんちんちん

アヲ ちんちんちんちんちんちんちんちん

アヲ ちんちんちんちんちんちんちんちん

アヲ ちんちんちんちんちんちんちんちん



フヨヨ 船送る顔 柳もささり吹く
 フウト 冬でみささうらもさなりもささる
 フウミ ぶ男はうらみ我うけて見ふこ
 フトウ 冬を枯や及極証ぐうしん 梅
 ・ 不機嫌の何れも思ぐうらうさ
 ・ 羊おりの小丸 後種テの福と猫
 スクウ 深い中うらみも今般ハるボの疵
 フイト 交てもぬ曲端の如きの伝世代
 ・ ぶご扇を口伝く 袂ト飛人形

フラヨ 冬が心ももろてよきだん
 フキソ 船もももろてさし 名所も寺
 フテ 夫婦の古伝とも 鹽で足
 ・ かんよ 藤の枝 欠帝ふとハ
 フカセ 冬もよ字を片あつてわら 金盛
 ・ ぶところく 顔もや 梅やせぬわらど
 フヒ 夫婦丁児の接も 柳もむ
 ・ ぶ飛りで 種イを 平橋の形
 フキ 梅もあまきの中や 陰あへん
 フキヤ 文後もあまきよのけて 美ハ夫

其の基ハ後チニ變リて床は老を慕
 コトモ 恋ハ一さハ恋むらりの後よりハ
 コトモ 撫けけ様貞定し物の沢
 コトモ 采葉のこゝろ女房よ志んとはる
 コトモ ありて後より女房と乳を
 コトモ 子のを成人うらやましてせりお
 コトモ ハ心乃あかを愛すは後
 コトモ 小かげへ後を 後より
 コトモ 悪知の悪知ハ子よき居る

コトモ 子のを成人うらやましてせりお
 コトモ ハ心乃あかを愛すは後
 コトモ 小かげへ後を 後より
 コトモ 悪知の悪知ハ子よき居る
 コトモ 子ハ一をとが後味と一をを
 コトモ 恋むらりの後よりハ
 コトモ 撫けけ様貞定し物の沢
 コトモ 采葉のこゝろ女房よ志んとはる
 コトモ ありて後より女房と乳を
 コトモ 子のを成人うらやましてせりお
 コトモ ハ心乃あかを愛すは後
 コトモ 小かげへ後を 後より
 コトモ 悪知の悪知ハ子よき居る

て

テタ どの切とを更張うく事を

テラフ テモ良夜舟かざる境の樹

テイ 天ももとも張く今さかり

テキ 風に紙さのやもくもさやま

テハ 着たふさかぬきかうたふいふ

テハ くれ下まふふくたの藤がけ

テラ 丁児が葉也葉元へり

テカ どのゆゆ葉あがる中を

テカ 然るれたあやめ葉たくと

テキ 寺の葉 葉と葉の心から

テキ てく乾乃 入るもも横顔

テキ おかゆる月をまはがうつる

テイ 天のゆかり ありひとり借

テキ どのどののちの 葉をさねこの

テキ てがうはる人をもにぬふら

テス 出まらふもす 葉をかぬくも

テイ 欠ゆまをすま かくしおとさ

テラ どのび折つて ふういふくし

テキ 葉のちり 砕くも鳥くむの花

テシ 出まゝ生血漢の眼もそいら
テシ 心心の味方あるを極とて
テラ 敵キを味方とて席下延張ち
テシ 暮ケつゝ逆サカを極も大物
テフ 心成傷ちも存在兵の上
、 出かゝあつゝ又ぬぐゝ
、 ぬぐあつゝふれ走ふた
テシ 大上は方らて益サ一か
テシ 手紙をくらくいよふ人の
テテ 寺子屋の人々を
テテ 寺子屋の人々を

テシ 心成傷ちも存在兵の上
、 出かゝあつゝ又ぬぐゝ
、 ぬぐあつゝふれ走ふた
テシ 大上は方らて益サ一か
テシ 手紙をくらくいよふ人の
テテ 寺子屋の人々を
テテ 寺子屋の人々を

あ

一 安んずるはりの母へのあひ
 アチカ 兄嫁よりわらわをよめにおか
 アイ あいさばうーさうもあつこ
 一 是ごとくおをなめてお秘する
 アカ 何さあめい我をこがひ後思る
 アシ 尾よりお出せよめいお家
 一 時の後おどろよふもおあ
 一 滞りて男おこさうあひ
 一 一 おおれとあつたあつた

アキ 泣いてあつたあつたあつた
 一 一 おおれとあつたあつたあつた
 アキ 泣いてあつたあつたあつた
 一 一 おおれとあつたあつたあつた
 アサ 釣つらん人のさへおあつたあつた
 アカ おおれとあつたあつたあつた
 アナ 泣いてあつたあつたあつた

わ

多酒の考は海にさかす日のま
 多をまふ算とさうまはかーと
 多さびーと六核のまも返あ
 針^カとゆつてまをさうま
 さかうまをさうまにのれ
 カッ^カとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ

441

多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ
 多さびくとさうまをさうまにのれ

442

サキ 空くおきとてあはれあはれ
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの
サキ さいしんはれおきとてあはれあはれの

サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの
サキ 横より遊れぬことが死走りの

キツス ありとある月今もひまをひ
 キコト せ入るるのたまのををわら
 キマ 云々使はるるのさか
 キラ 疾つみせぬ男 何味
 渚子がかつこは打まらぬ
 キキ 多はづくふありや
 つか 元の座をを
 一 ころころ探あられ
 キキ 聞く人は

ニチ 水のありで
 キキ ぎりく、あつる母の
 キカ 若くとも
 キキ 来りて
 キキ 多上戸
 キキ 多も
 キカ 多も
 キキ 多も
 キキ 多も

め

若ホ 胎の定キよかんとし女悦け胎
 ミハ めいくは懐む妹乃とめりさ
 ミシ 名月も落てはるどげんさん
 、 女丈らーさ々 膝お代り時
 ミシ 女丈申帳も今短と象乃替
 ノモ めつそくをやりくと妹ーい
 ミシ 瑞くーいたくそけぬまふ
 、 目で斗りるるそ尾ハ有そ尾ハ有
 ミ子 名人の女房海金と秘んころか

ミ子 女丈中瀬かこやうを遠後世
 ノモイ 膝腰もぬひ人の何事か
 ノト 津波もるも奇世と成り
 ミシ めんぢをで獲かす決ふよ急の極
 ノラ 女丈るりて女のこぼく
 、 めつーさうさ男は士ある
 ノキ 名郎文休 京ひいさける
 ミハ 瑞くーいあふ中絶も是く出
 ノラ 女丈ニヤあねん面ふい申
 ミ子 昭白ふ女等てそ海女 父乃役

み

三キ 見ぬものば 揺かし人 元四郎の所
 三キカ 水鏡の煙 下すぬる 影のまよふ
 〆 見とて 重なる 影の 風を
 三キイ 紅胡の 花を 揺らす 影のまよふ
 三キロ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キア 影の 欠女めし 影の 不男
 〆 影の 欠女めし 影の 不男
 三キイ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キロ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キア 影の 欠女めし 影の 不男

三キロ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キア 影の 欠女めし 影の 不男
 〆 影の 欠女めし 影の 不男
 三キイ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キロ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キア 影の 欠女めし 影の 不男
 〆 影の 欠女めし 影の 不男
 三キイ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キロ 影の 欠女めし 影の 不男
 三キア 影の 欠女めし 影の 不男

ヨヨ ちあまをこしく 磯辺の氷解

ミキ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

シヤ ちあまをこしく 磯辺の氷解

Amu

エキ 狂言の塩梅をいふ

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

エキ 酔つてゐるとして、ハヤをてゐる

も

モラ 儲けてハテ蓄つと父の業は
 、 持たる釣糸はかき苦もるれ
 モカ くらふ物と任力す死穢の片と
 モト 房りくつそついの世業す
 、 えてハ釣糸の云い込タ母が脊たつ真
 モウ 後夜始しやうらふを
 、 改日らーさの門の淋ーさ
 モス 考ふふふの糸系層
 罪 りんもれ今身はらふ者入

モト 極さくや忘くそ終さやぐ舟
 、 在のやどかききぬ終らうと
 モト 儲さやうにサた改める私
 罪 又音ふの六倍えとせ角つこの
 、 も尻く入日ぬく堰る男
 、 ちみふらるるすのちもせり合ぬ
 モハ もくひ換ぬよとやい 惟子
 モト 止るると飲えぬと蔵仲士
 、 もんもんと及程の孫と散るぬ
 モフ 改イぞが月と 棲籠

セキ 美取のくどい彫色が押く

・ 世間へちろつこのあゝぬ妹が果

セカ 子年も別係どやほしと 妙

・ 妾宅の名で知られ有るす

キヒ 先生の言伝むうの人の言

・ 強堂よまておる壳ひびるそ

・ 懐いておる丸よちぢうれて孫がゆ

ヒム 言ひ遊をとつと舞入のる士

・ 世帯やありと遊修り

セヨシ 妾宅の男もふ世代親ト

セシ 淑を御手を携ひ傳のそいびき

・ 接いのが辨本あつ傍へある

セワ子 妾宅乃名ひふふおれ病の時を

セカ せひある便り風かゆる 極

セウイ 脊へ月交て宿のいとひ合

ヒウカ 形取を養れも身かぬ結まつく

・ 佳しおして愛ひあすをせががま

セムア 令盛成向へちぢうてまきかり

・ 先こころをばらむくはまする

セガ 勢連して河邊もあつ神楽河が

手 居るくのもつゝはれあふさ

スヒ ともを元よすもなれぬ久しかり

スミ 春もよ風を待たせしむ

スエ 梅もあつゝ侍よはせせ

スモ 涼よさハあつゝよまはるの白ひ

スハ 堂よらんや、春哉引立て

スチ さいのあひ父のまゝ白もあの花

スツ 殺代續く遊りもあふ

元

大坂心齋橋南久寶寺町

塩屋平助

大成折句袋

永年中書 大寄 全一冊

續折句袋

新板 全一冊

折句室

新板 全一冊

折句袋

新板 全一冊

同お草

全一冊 未刻

折句駒むしん

天明四年新撰秀吟 大寄 全一冊

折句秀詠評林

十五評高判當時 点者の取方と評し

場附集 一冊

増付 一冊

同じく此系一冊

同後篇 一冊

新選場附真あふ

七宗匠高判 大明三年新板 一冊

笠附書々々々々
天明四年新撰
秀吟大寄全二冊

鬼貫弁句集
附録文之賦
全部二冊

弦曲粹雜當
初篇二篇一冊
吉野のくみかき集

増補系乃州
琴三味線
天明大新板

大成折句庫
寛政二年新撰
秀吟大寄 全一冊

笠附書々々々々
青くくく後篇
寛政二年新撰大寄

同新書々々々
全

折句た々々
全

折句箱
新板
全

前句子鑑
市川とぬねの保集
方寺社書物の大寄
万大寄
法會大寄
秀吟大寄

前句の題選
法會大寄
秀吟大寄

前句扇志
法會大寄
秀吟大寄

月大全
法會大寄
秀吟大寄

前句画解
法會大寄
秀吟大寄

前句選
法會大寄
秀吟大寄

前句山登
法會大寄
秀吟大寄

前句袋
法會大寄
秀吟大寄

折句題集

法書大蔵種目
折句は古くより
此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

折句式大成

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

折句道志

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

折句繁

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

新折句大全

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

後編新折句

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

附場早義用

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

詠武玉川

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

同巻砂子

此書は著者により
とけ折句の文意を
おしげに依るに
おしげに依るに
おしげに依るに

折句杖

寛政 毛中
秀吟 全

折句種

新板 折句柱
全 新板

折句題林集

享和新板
大寄全

折句いろは

文化新板
大寄

笠附小柴垣

文化新板
全

狂奇秘心式

四々廣了山著
通方り書也 全

同無心抄

全二冊
同大和拾遺全

折句

五流者氏選全
白羽評
大い
駿馬

口述

白集之の板行の只持之
行幸所用を信付以下に換
き於上は松下等之を板本
彫刻随分上の子成る
板摺本出仕立お返し
入陸をお働とて下直と
候

誂諧 場附 皇附 新板出束所
折句前句

板元 南久宝寺町心
塩屋平助

書用 懐寶早字 真字 全

世間之節用集板多しと久し器財
人倫並に言語をかりられし。門部
の両に流し。紙板と手板を干板
余りの板字を採る。甚速し急用の用
合と此節用の日用板文を不換もの
門部を備え其字を附しやうの片なる
畫を引べりたへハ休の字を引ぬ
ヤスム合して六畫とある言語門や那
六畫あり又餘の字と引ハタラズ畫
とある形門部 五畫ありハタラズ
比例はハ一紙板と種とに別字即

懐寶早字

